

はしがき

著者	梶浦 善次
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	10
発行年	1977
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001988/

は し が き

学 長 梶 浦 善 次

研究紀要第10号が出版されることとなったが、短大としては当然の業務とはいえ、正確に予定の期日にでき上がることは、何といたっても喜ばしいことであり、寄稿者並びに編集委員各位に対して心から敬意を表したい。

ふつう研究紀要は、研究論文の集録であるが、服飾美術や工芸美術のごとく制作活動をその使命とする学科の成果をも一定の基準に従って作品発表という形で採り入れることによって、紀要の性格を大きく広げることになったものである。また教員諸氏の学会その他の活動を広く記録することによって、年度における本学の研究的活動の全貌を表現するものとなっている。このことは、この規模の短大としては可能なことであり、また必要であると思う。それは本学の歴史の内的な資料を形づくるものとして深い意義をもつからである。

私たちの研究がささやかなものであっても、学問の本質上それは国際的な意味をもっていることも忘れてはならない。現に最近英国のある機関から研究紀要の寄贈を求められている事実があるのである。私どもの研究紀要が、国際的な評価に耐えられる質的に高いものとなることは、私の単なる夢想に過ぎないのであろうか。研究紀要が年とともに充実されるよう念願するものである。

なおこの紀要第10号は、西田正男教授の退官記念号の意味をもっている。西田教授は、生化学的研究を専門とされる方であり、農業試験場その他の研究機関に勤務され、本道の農水産物にかかわる基礎的な研究によって大きな貢献をされた方である。本学には、昭和41年から勤務され現在に至っている。同氏はもともと教育畑の人ではなかったが、そのことがまた教壇上の人としてはユニークな教師となったと考えられる。惰性的な教職者としてよりは、純粋な一個の人間として学生の指導に当たられたのであり、その天衣無縫ともいべき人柄は、学生や同僚のすべてから敬愛されたのである。氏はまた道内の私大連合に、本学の教職員の代表として参加され、道内の大学振興のためにもご活動を願ったのであった。氏はまた前学長田所哲太郎博士の愛弟子のひとりであり、この紀要に対する田所先生の論文については、種々氏の手を煩わしたことも忘れてはならない。

惜しむらくは、同教授は、近年宿痾のために悩まされていたが、一病息災といわれるようにご健康に一そうの留意をされ、さらに多くの年月を加えられることを切に祈る次第である。